

# 「自分でえらんで」(三年)の学習像を描く

学習指導の留意点

札幌市幌南小学校教諭

川嶋 英輝 かわしま ひでき

はじめに 自由選択の危険

「自分でえらんで」は、学習材自体を子どもが選択し、自らの学習経験をもとにして主体的に学習活動に取り組むように設定されています。

それまでは、教師から提示された題材をみんなで学習することしか経験していない子どもたちに、「さあ、自分で学習するお話を決めてください。今まで勉強してきた方法を使って、楽しみながら自分なりの学習を進めましょう。」と投げかけたなら、当初は戸惑いを見せるにしても、ある時期からはかなりの意欲を持って学習に取り組むものと予想されます。なぜなら、子どもたちは自由度のある活動が大好きだからです。そして、自らの意思が反映される活動には、いつも以上の集中力と持続力

新たなものが子どもたちに取り入れられる学習。

人間関係の新たなネットワークが広がったり、他者との心の結び付きが深まる学習。

得ている知識を体験化したり、練習や訓練の場から実際に活用する場へと進む学習。

子どもたち一人ひとりが、その後の学習への意欲を高めたり、新たな活動への見通しが持てる学習。

学習像としては非常に網羅的ですが、それは、選択的・自力追求的学習の礎を築くこと、多様な学習活動を保障していくことを大切にすることを考えると、学習像も多様に想定しておくことが個別の支援に生きるものと考えられます。

二 具体的学習活動を学習像と結び付ける

学習像を網羅的に置くだけに、具体的な活動と学習像との結び付きを整理しておく必要があると考えます。

子どもたち個々が活動を選択するのですから、教師は個々の学習成立のポイントを掴んでいないと、楽しさだけで終えようとしているのか、その子の学びとなつて終えようとしているのかの判断がつかず、個々への関わりを適切に行えないと思うのです。具体的学習活動と学習像を結び付けて整理しておくことは、個の学びの成立基

が發揮されるからです。

「好きなお話を選んでいいの?」「やりたい方法で進めていいの?」などと、何度も教師に確かめに来る姿が見えるようです。学習を進めていく中で、「先生、おもしろいよ。」「先生、楽しかったよ。」「などと、笑顔で語りかけてくる声が聞こえてきそうです。

しかし、この「自分でえらんで」の学習が全くの自由学習として子どもたちに委ねられたとすると、「一年間のまとめ」という枕詞が付いた楽しいイベントとして子どもに残るだけで終わってしまうのではないかと危惧します。

一 学習像を描く

せっかく新しい意図のもとに設定された教材ですから、「自分で学ぶ」ことを保障した学習として、私は次のような学習像を描きます。

「がんばったよ」「楽しかったよ」という満足感に加えて、「自分でやり遂げたよ」「自分にもできたよ」などの成就感や達成感が得られる学習。

それまでに経験した学習活動が、効果的・効率的な方法として実感できる学習。

それまでに経験した学習内容や活動方法に加えて、

準を教師が持つことと同じ意味合いを持つものと考えます。その基準を持ち合わせていないと、学びの成立へと導く支援も行えません。また、学びを成立させた子どもへの正当な評価も難しくなるのです。もちろん、「自ら学び自ら考える力」を、「児童が、自らの力で教材と取り組み、今まで学んできた方法を生かして、楽しみながら自分なりに学習する」ことと捉えての教材ですから、学習成立の基準は児童個々によって異なることは留意しておかなければなりません。

しかしながら、子どもが体験的に学ぶということを経験をもとに新たな事柄を取り入れること、「比較することによってよさや確かさを判断すること」「実際の場で行うことによって実感すること」と大きく括つたなら、前述で描いた学習像そのものが基準としての意味合いを持つようになるのではないのでしょうか。

ちなみに、  
 は「具体的な活動の全般に、  
 ター作り」「新聞作り」「帯紙作り」などの表現方法を選択する際に、  
 は「発見ノート」や「クイズブック」などの追求活動にあてはまるものと考えます。  
 は「音読発表会」や「読み聞かせ」「インタビュー」や「ポスターセッション」などと結び付けて考えています。

### 三 指導にあたって

#### 1 題材と活動の選択

子どもたちは、教科書に載っているのだから「モチモチの木」と「虫のゆりか」の両題材を学習すると思ってしまう。そして、どちらの題材も学習することを楽しみにするはずですが、なぜなら、どちらの題材もとてもおもしろく、好きになれる題材だからです。



「どちらか一方を選んでください。」という投げかけには、「両方学習したい。」と返事をするに違いありません。しかし三年生には、両方を学習することも、題材によって活動を選択することも難しいと考えます。それよりも活動によって題材を選ぶことの方が発達段階として適当だと考えるのです。「私は読み聞かせをしたいので、『モチモチの木』を選びました。」「僕は昆虫の図鑑作りをしたいです。」「などと考える子どもの方が多いように思うのです。

ですから、事前にどんな学習活動をイメージさせ、大まかな選択をさせることによって題材の絞り込みが少しでも容易にできるように考えたのです。

#### 3 個々の取り組みを集団の共有財産に

基本的には、子どもたち個々が取り組んでいる活動です。しかし、学ぶ場を共にする者がみんな学び合っているんだという意識は常に持たせたいものです。

学習の終わりの段階では、教室の仲間が互いに取り組んだ活動の内容や成果を交流できる時間を設定します。

交流の仕方は、発表会・報告会ではなくポスターセッションの形やまとめシートの掲示が望ましいと考えます。発表会・報告会では、全員に向けて伝えることを全員が行わなくてはなりません。ポスターセッションやシートへの掲示では、子どもたちが知りたい情報の持ち主を直接尋ねることが可能になります。シャワーのように浴びた情報は、わずかしき記憶に残らないでしょう。しかし、自らが求めた情報は、次回の選択の判断材料として蓄えられたり、取り組みのノウハウとして認知され、蓄えられたりします。さらにこうした経験は、学習者個人の学びの財産になるばかりでなく、集団の共有財産にもなるのです。

新しい教科書になって、新しい学習の場として設定された「自分でえらんで」なのですから、自ら求める機会もまた、「生きる力」の育みの場の一つとしたいものです。さらに、友達からもう一つ取り組みへの言葉かけは、

活動の大まかな選択とは、「他の人とかかわる活動」を進めるのか、「自分だけの活動」を行うのかという選択です。具体的な活動については、もちろん両方のものを提示しなくてははいけません。

#### 2 活動枠の設定

子どもたちに個々の学習活動を選択させるときには、一人で取り組むことという活動枠を設けます。それは、三年生という発達段階と、選択的・自力追求的学習の礎を築くというねらいを置いたとすると、無条件選択より限定選択が適当だろうと考えられます。

「ミニ劇作り」などは選択項目には入れません。ただし、「一人音読」の活動を経て、役割読みによる読み聞かせなどにつながることは、発展的活動として認めていくと考えます。「虫のゆりか」新聞」などの複数による編集も同様の前提に立ちます。追求を個人でスタートしますが、資料が集まった段階で、同様な活動に取り組んでいる友達との情報交換が行われ、グループで活動することもあるでしょう。その場合、複数での活動でよしと判断したなら、それは子どもたち自らが取り組み、自ら考えた結果であり、それぞれの子どもも活動として認めることが大事だと考えます。

教師の評価の言葉と相まって、その子どもの達成感・成就感を一層高めることとなるでしょう。

#### 4 学習時期

「自分でえらんで」の学習時数は十四時間です。学年まとめの学習として実施しても、三月に入ってから学習で十分に終えられる時間数です。しかし、実施開始時期は、二月上旬から中旬ぐらいが適当と考えます。自分なりに学習することを保障するには、子どもが自らの時間をこの学習に費やせる余裕を与えることが大事であると考えられます。

慌ただしい選択と短期間の活動よりも、子どもの中で十分に考えをまとめられたり、余裕をもって練習や記入ができることの方が、学びの成果を子ども自身が見い出せるものと考えられます。

